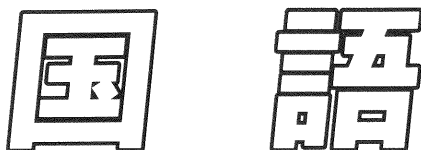


2025年度 入学試験問題



H T J (前期 A)

(50 分)

〔 注 意 〕

- ① 問題は㊦～㊨まであります。
- ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
- ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入してください。
- ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入してください。
- ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点(「、」「。」「」)、記号なども一字に数えます。
- ⑥ 試験開始の合図があったら、全てのページが揃っているかを確認してください。

一

次の短文の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。文字は丁寧^{ていねい}に書きなさい。

- ① 旅行先の美しいフウケイ。
- ② 船のキテキが鳴っている。
- ③ 津波^{つなみ}に対するボウビを固める。
- ④ 留学生がシユクシヤに帰って来た。
- ⑤ ココロヨク申し出を受け入れた。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には一部省略したところと、表現を改めたところがあります。)

ことば、というものは、動物の中で、人間だけが発見し開発した複雑な記号体系である。そして、ことば、というものを発見した瞬間から、われわれ人間の目のまえには、他の動物の見ることでできないあたらしい世界がひらけた。いや、ひらけてしまった。

〈中略〉

イヌだのネコだのが生きているのは実在の世界だ。かれらは、たしかに、みごとに感覚器官をそなえており、環境にたいして反応する。また、かれらの行動のなかには、選択的行動も発見される。しかし、かれらは「もの」としての環境に反応することがその情報行動のすべてであって、「ことば」ないしシンボルにたいしては、ほとんど反応することがない。よくひきあいに出される例だが、人間なら、カラー印刷のビフテキの写真をみて、食欲をかき立てられることもあるが、イヌに、どんなにおいしそうな肉の写真をみせても反応することはない。人間は、スリラー小説を読んで、恐怖感におののくことがあるけれども、ネズミにネコの話をしても、いっこうに反応はうまれないだろう。イヌは、実在としての肉があたえられてはじめてそれにとびつくし、ネズミは、実在としてのネコが近づいたときにはじめてAする。かれらは、シンボルにたいしては、ほとんど反応できないのである。

もちろん、訓練によって、イヌは、かなりいろいろな芸当をみせてくれる。しかし、おすわりという人間の命令は、イヌにとってはひとつの条件反射を形成するにあたつての信号音であるにすぎぬ。おすわり！ という命令をうけてイヌがすわるのは、イヌが人間のことばを理解しているからではけつしてない。訓練すれば、走れ！ ということばによってイヌをすわらせることだって可能だ。人間にとつて、ひとつひとつのはなしことばは「意味」をもっているけれども、イヌにとつては、人間の発することばは、たんなる物理的な「音」なのである。人間の発するさまざまな音のなかのひとつが、イヌの特定の行動のための条件信号になっているだけなのだ。

* 夏目漱石の『吾輩は猫である』の書き出しの部分には、有名な「吾輩は猫である。名前はまだない」という一節があるが、ネコの世界には、名前がないのである。ネコは、環境の一部に、たとえばイワシだのカツオだのという名前をつけているわけではない。ネコは、その嗅覚だの視覚だのによって、食べ物ものの存在を、実在として識別できるとしても、ネコにとつて、環境とは、無言の実在世界そのものなのだ。B、みずからに名前をつけることなど、ネコには、できた相談ではない。ミケとかタマとか、人間が勝手につけた名前を、ひとつの信号音としてききとることはできるだろうけれども、それがじぶんの名前である、などとネコが自覚しているわけではないのである。

人間は、まさしく、ことばを獲得することによって、実在世界から離脱したのである。われわれは、たとえば、山をみたり、花をた

のしんだり、というときには、「もの」の世界とかかわりあっているのだ、と主観的にはかんがえる。しかし、山には、すでに山という名前をあたえられている以上、もはや、素朴な実在ではない。人間は、たしかに山をみる。C、それは、人間のあたまのなかにある「山」というシンボルをいったん通過したうえで行動なのである。野に咲く一輪の花をみても、われわれは、それをタンポポだ、と識別する。われわれの精神のなかには、タンポポとか、スミレとか、かぎりなくたくさん「名前」が、「概念」として蓄積されており、その概念を経由してでなければ外界の事物の認識ができないのだ。われわれは、タンポポという名で呼ばれる花をみるのであって、虚心にその植物じたいをみるのではない。よしんば、タンポポという名前は知らなくても、それを、「花」の一種としてみてしまうのである。名前も、観念もない、無心なすがたで人間が物理的な実在としての環境に向きあうことができるのは、おさない子どもころ以外にない。

とにかく、これまで一万年ほどの人類の歴史のなかで、われわれは、環境のすべての部分に名前をつけ、概念化を進行させてしまったのである。*ラファディオ・ハーンの『怪談』に登場する「耳なし芳一」は、悪霊から身をまもるために、からだの隅々まで呪文をいれずみのように書きこんだが、われわれをとりまく環境のすべては、いま、ぎっしりとことばで埋めつくされているかのようにもみえる。空にかがやく無数の星は、天文学の発達によって、順々に記録され、特定の固有名詞だの番号だのによって呼ばれるようになった。いま、人間によって名前をつけられていない星は、ひとつもない。もちろん、すべての星が発見されているわけではなく、毎年、いくつかのあたらしい星が見つけられている。しかし、見つけられたとたんに、人間はその所在を記録し、名前をつけてしまう。文学的ないいかたをするなら、いまや天上には、いささかのすきまもなく、ことばが書きこまれ、われわれをとりまく巨大な環境としての宇宙すらもが、完全に概念化されてしまっているのである。

地球そのものも、ことばによって塗りつぶされた。一五世紀以来の「発見の時代」は、まず第一に、地球がまるいことを発見し、つぎつぎに大陸や島を発見した。手あたりしだいに名前がついた。太平洋にちらばる無数の島は海図に記載され、アフリカや南アメリカの内陸部ふかくにはいりこんだ探険家や地理学者は、それまで空白だった地図のうえに、いろんなことを書きこんだ。いまや地球上のすべての場所は、それぞれに名前をもたされてしまったのである。名前のないものは、いまわれわれの環境のなかにはひとつもない。ひとつひとつのもののやできごとに、われわれは丹念にことばのレッテルを、びっしりと貼りつけてしまったのである。地球ぜんたいが、巨大な「耳なし芳一」なのだ。いや、「耳なし芳一」は、耳だけに呪文を書き忘れたために、耳がなくなってしまったのだが、地球の表面には、もはや書き忘れられた部分は、なにものこっていないようにみえる。

シンボルの世界は、実在の世界のうえにかぶさった密度の高い皮膜のようなものなのだ、といってもよい。そして、その皮膜は、そ

れじしんの運動法則を獲得した。いっさいの實在に、いっこうにかかりあうことなく、シンボルの世界は自由にその独自の運動をはじめ。ひとつの花にタンポポと名前をつける、といったようなばあいには、實在と名前ないしシンボルとのあいだに対応関係があるけれども、同時に人間は、非實在的な概念をも続々とつくりはじめた。D、「神」の概念などがそのいい例だ。われわれは、神というものを實在として知覚し、あるいは認識することはできない。神というのは、人間の頭脳がつくりだした抽象的で超越的な概念だ。それは、實在の世界から完全に離脱してしまっている。しかし、それにもかかわらず、われわれは神についてかんがえ、神についての理論体系をつくることもできる。

マンガ映画によくあらわれるギャグのひとつに、人物がガケのあるのに気づかず、空中を遊歩する、という場面がある。それまで地に足をつけて歩いてきた人物は、ガケにさしかかっても、足もとに地面がなくなつたことをすっかり忘れて、そのまま空中を歩きつづけるのだ。そういうばあい、その人物はふと足もとを見て、足が地についていないことを発見し、その瞬間に、まさかささまに谷底に落ちてゆくのである。われわれにとつて、シンボルというのはそれに似ている。いつのまにか、Eする實在がなくなっているのに、ことばのほうは、どんどんと空中を歩きつづける、すこしもたじろいだりしないのである。たじろがないから谷底におちることもない。われわれは、ことばをつかうことによって、堂々と空中を闊歩しているのだ。

(加藤秀俊『情報行動』)

(注) *ないし……または。

*夏目漱石……明治時代の小説家。猫の目から見た人間社会を描いた『吾輩は猫である』という代表作がある。

*嗅覚……においの感覚。

*概念……個々の事物に共通する性質からイメージされる、おおまかな意味内容。

*経由……目的地へ行く途中である地点を通ること。

*虚心……対象をありのままに受け入れようとする態度であること。

*よしんば……もし。

*観念……ある事物に対する考えや意識。

*ラフカディオ・ハーン……明治時代に來日した作家・日本研究家。日本名・小泉八雲。さまざまな日本の文化を探究し、世界へと紹介した。日本に

伝わる怪談をまとめた『怪談』はその代表作である。

*発見の時代……十五世紀半ばから十七世紀半ばまでのヨーロッパ人によるアフリカ・アジア・アメリカ大陸への大規模な航海が行われた時代。「大航海時代」ともいう。

* 皮膚……皮のような膜。

* 中空……空のなかほど。

* 闊歩……大手をふって歩くこと。

問一 波線部 X「おののく」・ Y「主観的」・ Z「丹念に」の本文での意味として最も適當なものを、それぞれの選択肢から記号で選

なさい。

X「おののく」

ア すっぱりとやめる。

イ だんだん後ろへ下がる。

ウ まじまじと見つめる。

エ 急に大声をあげる。

オ ぶるぶるふるえる。

Y「主観的」

ア 自分自身の考え方や感じ方にもとづく様子。

イ 物事に対する考えが不十分で間違っている様子。

ウ 多くの人に共通する感覚にもとづく様子。

エ 自分の考えや行為の正しさに自信がある様子。

オ 物事を全体的にとらえようとする様子。

Z「丹念に」

ア 早急に。

イ 熱心に。

ウ 慎重に。

エ 丁寧^{ていねい}に。

オ 強引^{こういん}に。

問二 空欄A・Eに入る言葉として最も適当なものを、それぞれの選択肢から記号で選びなさい。

A

ア 満足 イ 協力 ウ 安心 エ 発見 オ 緊張きんちやう

E

ア 行動 イ 対応 ウ 決心 エ 反発 オ 整理

問三 空欄B・C・Dに入る言葉として最も適当なものを、それぞれ次から記号で選びなさい。ただし、同じ言葉を二度以上選んではいけません。

ア いまや イ だが ウ たとえば エ ましてや オ まるで

問四

傍線部①「かれらは、シンボルにたいしては、ほとんど反応できないのである」とあるが、それでは何に反応するのですか。本文から十字で抜き出して答えなさい。

問五

傍線部②「イヌは、かなりいろいろな芸当をみせてくれる」とあるが、イヌが芸当を見せるときに、イヌにはどのようなことが起こっているのですか。最も適当なものを次から記号で選びなさい。

ア 人との信頼関係しんらいの中で、直感的に相手の意図を汲み取って反応している。

イ 人のことばの意味がすっかり分かっており、そのことば通り反応している。

ウ 生まれつき持っている動物としての運動能力によって、反射的はんしやに反応している。

エ ことばの意味には関係なく、それを条件信号として受け取って反応している。

オ ことばではなく、指示する人の動きや合図にしたがって反応している。

問六 傍線部③について、「ネコの世界には、名前がない」といえるのはなぜですか。最も適当なものを次から記号で選びなさい。

ア ネコは自分で名前をつけることができず、人に飼われて名前をつけてもらうまで名無しでいるしかないから。

イ ネコはものを名前で認識しておらず、たとえ人に名前をつけられてもそれが自分の名前だと自覚することはないから。

ウ ネコにはネコのことばがあり、人間がつけた名前とは異なる別の名前^{こと}をつけてものを認識しているから。

エ ネコの世界におけるものの認識はおおざっぱであり、名前をつけてものを区別する必要がないから。

オ ネコは本来ことばのない野生の生き物であり、人に飼われない限り、名前というものの存在を知ることがないから。

問七 傍線部④について、「おさない子ども」はなぜ無心なすがたで物理的な実在としての環境に向き合うことができるのですか。最も適当なものを次から記号で選びなさい。

ア おさない子どもは深くものを考えることがなく、何かの名前を聞いてもすぐに忘れてしまうから。

イ おさない子どもは、見たことがなくて名前の知らないものに対して興味を持ち、自ら接していこうとするから。

ウ ことばや名前の存在を知る以前のおさない子どもは、名前や観念でものを認識することがないから。

エ 自由な発想をするおさない子どもは、固定化されたことばや観念ではなく、自分自身のことばで表現するから。

オ 純粋^{じゆんすい}な心をもっているおさない子どもは、自然のすばらしさや美しさをすなおに受け入れようとするから。

問八 傍線部⑤について、「天上には、いささかのすきまもなく、ことばが書きこまれ」というのはどういうことですか。本文中の言葉を使って三十五字以上四十字以内で説明しなさい。

問九 傍線部⑥「地球ぜんたいが、巨大な「耳なし芳一」なのだ」とはどういうことですか。最も適当なものを次から記号で選びなさい。

ア 地球上にさまざまな国や民族の言語が存在している様子が、からだ中ことばで埋めつくされた「耳なし芳一」の姿に似ていること。

イ まだ人に知られていないものが残っている地球の様子が、耳にだけ呪文のことばが書かれていない「耳なし芳一」の姿に似ていること。

ウ 隅々まで調べつくされたことで人に管理されている地球の様子が、からだ中に呪文のことばを書きこむことで悪霊から守られた「耳なし芳一」に似ていること。

エ 自分たちの発見した大陸や島に名前をつけてきた歴史が、悪霊によって「耳なし芳一」と名付けられたという伝説に似ていること。

オ 人によって地球上のあらゆるものに名前がつけられた様子が、からだ中に呪文のことばを書きこまれた「耳なし芳一」の姿に似ていること。

問十 次の中から本文の内容に合っているものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 実在としての肉があたえられればイヌは反応するが、人がそれに反応することはない。

イ イヌやネコはみごとに感覚器官をそなえているので、環境に反応する手段としてのことばを必要としない。

ウ 「発見の時代」以前の人間社会には、島や大陸に名前をつけるという発想はなかった。

エ 人は存在を実際に認識できないものでも頭の中で作り出すことができるし、それについて考えることができる。

オ ある花が咲いているのを見たときに、その花の名前さえ知らなければ、それを実在として見ることができる。

カ 人はことばを獲得した以上、山や花を見ても花を楽しんだりしても、「もの」の世界とかかわっているとはいえない。

キ 人が自分の飼っているネコに名前をつけるのは、その飼い主にとってもネコにとっても無意味なことである。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

多美子は、島根県隠岐島の伝統行事である古典相撲に地区代表として出場している夫の英明を、娘の琴世と応援している。五歳の琴世は亡くなった前妻の子で、多美子のことを、「あのねえ」と話しかけているうちに「あのねえちゃん」と呼ぶようになっていく。相撲はなかなか勝負のつかない大熱戦で、休憩をはさんで取り直しとなった。

土俵^{どひょう}下^{した}に下^{くだ}りた英明^{えいめい}を、山本清一^{やまもと せいいつ}たち地区^Iの世話役^{せわやく}が抱^だきつかんばかりに取り囲^{くも}んでいる。手に手にタオルを持ち、英明^{えいめい}の全身^{しんぜん}をか
いがいしく拭^{ぬぐ}いたり、水^{みづ}を与^{あた}えたりと世話^{せわ}をやっていた。いずれも気合^{きあ}い充分^{じゅうぶん}であり、目^めが吊^つり上^あがって真剣^{しんけん}な顔^{かお}つきだったが、悲壮^{ひそう}
感^{かん}は「X」なかった。英明^{えいめい}の頑張^{がんば}りがうれしくてたまらないのであり、情熱^{じやうねつ}がほとばしって生き生きと輝^{かがや}いていた。

一人、山本清一だけが英明に何かをしやべり続けていた。血走った目から涙が流れていたが、かまわずにしやべり続けていた。涙を拭こうともしなかった。泣いているのを大勢の観衆に見られることなど、何とも思っていないかのようにだった。一心不乱な表情で、瀟々然と英明にしやべり続けるのだった。

「ちよつと
A、
あんた大丈夫？」

伸江が多美子の顔を覗き込むようにして声をかけた。《ア》

「うん、大丈夫」

と多美子はいった。大丈夫といったものの、やつとしほり出したようなかされ声だった。多美子は右手で顔の涙をぬぐった。

「本当？ 顔が真っ青だよ。具合悪いんじゃないの？」

「大丈夫。具合は悪くないけど、何だか息苦しくて」

「少し座^{すわ}って休んだら？ 立っているの辛^{つら}そうじゃない」

伸江は多美子を見つめて心配そうにいう。

「ありがとう、伸江さん。私は大丈夫。琴世ちゃんは大丈夫？ 疲れた？」

と多美子は琴世に笑顔を作った。琴世にはいつもやさしい笑顔を向ける多美子だったが、小さな硬い表情^①の笑顔になってしまった。

 $\frac{1}{2}$

「うん。平気だよ。あのねえちゃんはずっと震ふるえているよ」

琴世は多美子を見上げた。相変わらず表情のない顔だった。

「大丈夫。手が痛かった？ お母ちゃん、ギョツと握りすぎた？」

「少し痛かったけど、でも大丈夫だよ」

「そう。ごめんね。疲れたら抱っこしてあげようか？」

「ううん。平気」

「お座りする？」

「疲れてないから平気。お父さんのお相撲、どうなったの？ もう終わり？」

「お父さんも、相手のお相撲さんも、疲れてしまってお相撲取ることができないから、少し休んでからまたお相撲取るんだよ」

「じゃあ、お父さん、負けたんじゃないよね」

「そうだよ。負けたんじゃないよ」

「じゃあよかった」

「お父さんのお相撲がまた始まるまで抱っこでもお座りしてもいいんだよ」

「あのねえちゃん？ お座りする？」

「お母ちゃんは大丈夫だから、立っていても平気だよ」

「じゃあ琴世もお座りしない。あのねえちゃんと一緒に立ってる。座るとあのねえちゃんと手をつなげなくなるから」

「あらあら、本当に琴世ちゃんはお母ちゃんと一緒のことがしたいんだねえ」

伸江はそういいながらしやがみ込んで琴世に笑いかけた。《ウ》

「お母ちゃんのこと大好きだもんね」

「うん」

琴世がコクンとうなずいた。

「でも本当は疲れたでしょう。お父さんのお相撲が始まるまで座っていていいんだよ」

「ううん」

琴世は伸江に首を振り、多美子を見上げた。《エ》

「あのねえちゃん」

「なあに?」

「ずっと手をつないでいてもいい?」

「いいよ」

「ずっと一緒だよ」

「そうだよ」

「どこへもいかないよ」

琴世はじつと多美子を見つめた。黒い瞳が何かを訴えて光った。^③

「いかないよ。お母ちゃんと琴世ちゃんはずっと一緒だよ」

「うん。あのねえ、んーと、あのねえちゃんは、お母さんみたいに写真だけのあのねえちゃんにならないよね?」

と琴世はいった。抑揚のない平板な口調だった。だが一途な思いをやつといえたというように、いい終えた琴世は大きく息を吸い込むのだった。

多美子は言葉に詰まってしまった。これまでも時々、琴世はどこか不安げな眼差しでじつと多美子を見つめることがあった。どこかすっきりとしない、目の奥にいいたいことを隠しているように感じられる眼差しだった。ずっといい出せなかった琴世の気持ちを、多美子は初めて理解した。

多美子は膝を折って琴世と向かい合った。

「どうしてそんなこというの?」

「あのねえ、あのねえちゃんも、お母さんみたいに写真だけになったら、さみしいから」

「お母ちゃんは……、お母ちゃんは天国のお母さんの分までずっと琴世ちゃんと一緒にいるよ。どんなことがあっても一緒にいるから。だからもうそんな心配しなくていいからね」

多美子の口から出た言葉が震えた。《オ》

「本当?」

「本当」

「本当に本当?」

「本当に本当。約束する」

「うん」

⑤

と伸江が琴世の頭をなでながら笑いかけた。

つてみようかッ」

嫌だあ……

琴世は多美子の腕うでにすがつていう。

「どうして?」

「だってえ、
恥はずかしい……」

「琴世ちゃんには本当に恥ずかしがり屋だねえ。お母ちゃんのことをお母ちゃんと呼べないのも恥ずかしいからでしょう?」

「琴世ちゃんはおねえちゃんなんだから、お母ちゃんはお母ちゃんと呼ばなくていいよ。もうお母ちゃんはCじゃないんだよ。」

「わかるでしょう？」

琴世は何もいわずに身体を揺すり続けるだけだった。

「時間ですッ。土俵に上がってッ」

行司ぎょうじのかけ声ひびが場内に響いた。

とたんに、

「待ってましたあああッ」

「頑張れよ！」

「いいぞおおッ、日本一いいいい！」

「しつかりいけよッ、*らいじん ふぶき雷神吹雪いいいい！」

「頼むぞおおッ、海鳳おおおッ！」

ざわついていた会場に、威勢いせいのいいかけ声が上がった。場内は一瞬いつしゅんにして再び大きな熱気に満ちた。

(川上健一『渾身』)

(注) * 仲江……多美子と同じ地区に住む女性。

* 海鳳・雷神吹雪……「海鳳」は英明の四股名しこな(相撲における力士の名前)。「雷神吹雪」は相手力士の四股名。

問一 波線部Ⅰ「抱きつかんばかりに」・Ⅱ「とたんに」の言い換えとして最も適当なものを、それぞれの選択肢せんたくしから記号で選びなさい。

Ⅰ「抱きつかんばかりに」

ア 抱きつきたくてたまらない気持ちで

イ 今にも抱きつきそうな様子で

ウ 抱きつかないとだけ決めて

エ 抱きついたと思ったらすぐに

オ 抱きついてはいけないと思いながら

Ⅱ「とたんに」

ア するとしばらくして

イ するとひと呼吸こきゅうおいて

ウ するとだれということもなく

エ するとすぐに

オ すると緊張きんちやうがとけて

問二 空欄Xに入る「全く」という意味の言葉を次から記号で選びなさい。

ア すべて

イ ひととおり

ウ まさか

エ まるで

オ あたかも

問三 空欄Yに入る最も適当な漢字を次から選び、その読みをひらがなで答えなさい。

上 ・ 下 ・ 横 ・ 涙 ・ 大

問四 空欄A～Cに入る最も適当な言葉をそれぞれ次から記号で選びなさい。

ア あねえちゃん イ 伸江さん ウ 琴世ちゃん エ 多美ちゃん オ お父さん

問五 本文には次の一文が抜けています。本文中の《ア》《オ》のどこに入れるのが最も適当ですか。記号で答えなさい。「水入り」

とは、相撲で相当時間が経過しても勝負がつかないとき、勝負を一時中止し、力士に休憩を与えることです。

水入り後の英明の相撲が気になって、気持ちが張り詰めているせいである。

問六 傍線部①・②の「の」と同じ用いられ方をしているものを、それぞれ次から記号で選びなさい。

ア ひまわりの咲く季節になった。 イ 大会参加は私のみだ。 ウ 「なぜ私に反対ばかりするの」
エ のどがカラカラなので水を飲んだ。 オ 子供の運動会で親が走る。

問七 傍線部③・④について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 傍線部③「黒い瞳が何かを訴えて光った」とあるが、「何か」を説明した次の文の空欄に入る最も適当な言葉を、本文中から五字で抜き出して答えなさい。

実の母のように多美子がいなくなるとほしいという琴世の（ ）。

(2) 傍線部③で「何かを訴えて光った」琴世の黒い瞳が、傍線部④で「やわらかに光った」のように変化したのはなぜですか。理由を二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑤「二人はつないだ手をゆつくりと揺れ動いた」とあるが、ここから読み取れる内容として最も適当なものを次から記号で選びなさい。

- ア 約束という言葉信じきれない琴世が、多美子の気持ちを確かめようとしている。
- イ 多美子が、もつと親子の関係を深めようと一方的にあせっている。
- ウ 仲良くなりたいと必死になっている琴世を、多美子が受け止めている。
- エ 多美子は琴世を思い、琴世は多美子を思い、二人の心が通じ合っている。
- オ 初めて両手をつないだので、手をはなしたくてもはなすことができないでいる。

問九 傍線部⑥「琴世は何もいわずに身体を揺すり続けるだけだった」とあるが、このときの琴世について説明したものとして最も適

当なものを次から記号で選びなさい。

- ア 「お母ちゃん」と呼ぶ気持ちは全くないのに、伸江に強制されているようでひどく反発している。
- イ 「お母ちゃん」と呼ぶ気持ちは全くないが、伸江に悪いという気持ちからどうしようかと迷っている。
- ウ 「お母ちゃん」と呼ばなくてはいけないという気持ちはあるが、まだ抵抗もあり、素直になれずにいる。
- エ 「お母ちゃん」と呼ばなくてはいけないという気持ちはあるが、二人だけのときに呼ぶと心に決めている。
- オ みんなの前で大声で父親を応援することが恥ずかしくて、かたくなになっている。

問十 本文についての説明として最も適当なものを次から記号で選びなさい。

- ア 四字熟語を繰り返し用いることで、登場人物の気持ち効果が効果的に表現されている。
- イ 過去にあった事件を回想する場面から、登場人物の気持ちの移り変わりが読み取れる。
- ウ 二重傍線部「嫌だあ……」からは、父に対する琴世の複雑な思いが読み取れる。
- エ 多美子と伸江の会話から、伸江と英明との関係が理解できるようになっている。
- オ 会話文によって、登場人物の関係や心情、その場の雰囲気（ふんいき）が自然と伝わってくる。